

春日ベース・ハウスの会を中心した 板付基地周辺の米軍ハウスに関する保存調査活動及び地域貢献活動

Conservation Survey Activities and Community Contribution Activities of US Military Houses
around Itatzuke Base Centered on Kasuga Base House Association

○松野尾仁美*1, 中野秀孝*2, 山村智子*3

MATSUNOO Yoshimi, NAKANO Hidetaka, YAMAMURA Tomoko

US military houses were built around Itatzuke Base in Fukuoka Prefecture under the occupation policy of GHQ, and there are still several remaining in Kasuga City and Onojo City. This paper reports on conservation surveys of the remaining status of US military houses and actual measurement surveys by the "Kasuga Base House Association" (to which the author belongs), as well as public relations activities to convey the history and culture of the relationship between the base and local residents at the time, and finally community contribution activities for building local community based around the former US military house.

キーワード：米軍ハウス，板付基地，保存調査活動，地域貢献活動

Keywords: US Military Houses, Itatzuke Base, Conservation Survey Activities, Community Contribution Activities

1. 序及び本稿の目的

連合国最高司令官総司令部 (GHQ) による占領政策下の福岡県板付基地周辺には米軍ハウスが建設され、現在も春日市と大野城市に複数残存している。その時代、地域住民は様々な形で板付基地に関わっており、住民や地域にとって米軍ハウスは当時を偲ぶ大切な存在となっている。一方で、当時を知らない住民が地域の歴史や文化を知る上でも、その遺産である米軍ハウスは重要といえる。そして、これらを市民に知ってもらうことや活用することは、地域づくりや住民のコミュニティ形成にもつながると考えられる。

筆者が所属する「春日ベース・ハウスの会」(以下当会と記す) は、そうした考えのもと、これまで詳細に調査されていなかった板付基地周辺の米軍ハウスそのものの保存調査活動を行い、さらには当時の米軍ハウスや地域との関係を知る人々への聞き取りや、それらの調査結果を住民へ伝える広報活動を行っている。また、カフェとして活用した米軍ハウスを活動拠点にしながら、昔を偲

ぶ住民との交流も図ってきた。

これら一連の活動は、単なる保存調査に留まらず、地域貢献に対しても、有効な成果が現れはじめていると考えられるが、他地域においてもこのような歴史的遺産を用いた地域コミュニティづくりの参考になると思われる。本稿はそれらの活動とその成果を報告するものである。

なお、本稿で扱う米軍ハウスとは「1950～1970年頃に米軍が駐留した板付基地(春日原住宅地区)の外に建てられた米兵及び軍属向けの住宅」と定義する。

既往の研究や調査では、福生市や入間市など他の地域での米軍ハウスやその活用に関する研究及び調査はなされているが、福岡県板付基地周辺を対象としたものは少ない。その中で、西尾氏ら¹⁾は板付基地周辺の米軍ハウスの建物やその分布状況などの概要を調査・報告しているが、本研究は米軍ハウスの実測調査や改変状況調査、当時を知る人からの聞き取りといった、より踏み込んで詳細に行った保存調査結果をまとめ、さらにそれらを用いた地域貢献活動を加えて報告するものである。

*1 九州産業大学建築都市工学部、准教授、博士(工学)

*2 株式会社なかの設計、代表取締役、学士

*3 福岡県大野城市教育委員会ふるさと文化財課、学芸員、学士
*1,2,3のいずれも、春日ベース・ハウスの会会員

Assoc.Prof., Faculty of Architecture and Civil Engineering,
Kyushu Sango Univ., Dr.Eng.
CEO, Nakano Sekkei Ltd., B.
Curator, Onojo City Board of Education CulturalFurusato
Property Division, B.A.

2. 板付基地と春日ベース・ハウスの会の概要

2.1 板付基地について

(1) 板付基地の成り立ち

1945年8月30日、連合国最高司令官マッカーサー元帥が厚木飛行場に到着し、福岡には米軍の先遣隊が、9月22日、春日村の旧日本陸軍造兵廠春日製造所・九州飛行機株式会社・九州兵器株式会社、大野村の中央兵器株式会社・株式会社福岡精工所の軍需工場を撮影した。連合軍は席田飛行場を板付飛行場とし、小倉陸軍造兵廠春日製造所を付属基地として施設整備を開始した。

板付基地の付属施設「春日原住宅地区」は小倉陸軍造兵廠春日製造所と南側に広がる田畑までの春日村と大野村にまたがる約156万㎡におよぶ広大な敷地に整備された。「春日原住宅地区」には417棟の建物があり、事務所や宿舎、家族用住宅（ディペンデントハウス）に加え、病院、教会、学校、ボウリング場、野球場、カミサリー（食糧販売所）、映画館などがあつた（図1）。



Numbers on map read left to right

AACS 23	Garage 28
Airmen's Club 26	Gasoline Sta 40
AP Bq 8	Guest House 10
Army Comm Agency 11	Gymnasium 31
Army Research Unit 4	Hospital 9
Bank 30	Housing Office 27
BQ/VOC 37	Housing Supply 7
Bowling Alleys 1	Laundry 5, 29
BX Stores 32, 34	Library 22
Cafeteria 34	NCO Club 16
Chapel 39	Officers' Club 38
Commercial Trans 12	Post & Reg. 15
Commissary 41	Post Office 17
Clothing Sales 18	Red Cross 20
Community Center 14	School 42
Credit Union 36	Service Club 35
Dental Clinic 3	Theater 33
Dining Hall 19	Thrift Shop 25
Family Services 21	Trans Billets 24
Finance 2	Veterinary 6

凡例部分の拡大
 図1 駐留する米兵向けパンフレット
 (春日市教育委員会所蔵)

「春日原住宅地区」には東門（イーストゲート）と北門（ノースゲート）があり、東門から西鉄白木原駅につながる通りを「白木原ベース通り」、北門から国道3号線につながる通りを「春日原ベース通り」とよび（図2）、米兵向けのバーやレストラン、テイラー等の店が立ち並び、アメリカを彷彿とするまちが出現していた。

1950年に勃発した朝鮮戦争で、板付基地に駐留する米兵が増員され、基地内の宿舎や家族用住宅が不足し、課題となった。そのため、基地外に米兵向け住宅「オフベースハウス」を日本人の土地所有者が建設し、日本人オ

ナー組合と米軍のオフベースハウス課が入居契約を結ぶかたちで、住宅供給が行われたとされている²⁾。

なお、米軍では、基地内の住宅はディペンデントハウスと呼ばれ、基地外の住宅はオフベースハウスと呼ばれていた。日本人から「米軍ハウス」や「ハウス」と呼ばれたこれらの住宅は、春日町と大野町に500戸程度あったとする資料がある³⁾。この米軍ハウスは、基本的に基地から5マイル（約8キロ）圏内と決められていた²⁾。

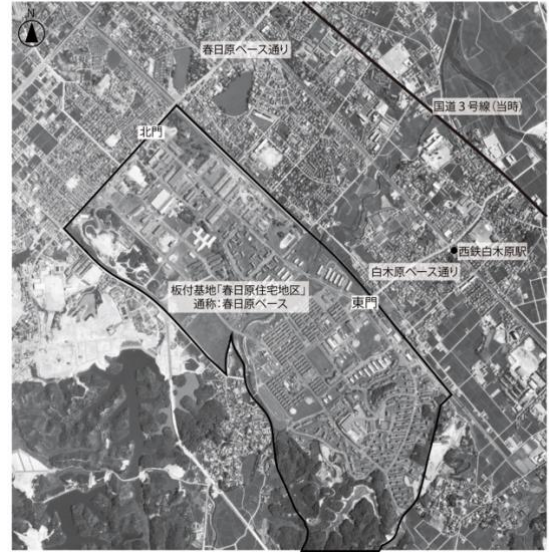


図2 板付基地「春日原住宅地区」空中写真1967年(国土地理院)

(2) 板付基地の返還とその後の社会状況

1972年4月、板付飛行場が日本に返還され、時を同じくして春日町は春日市に、大野町は大野城市になり、市制施行が始まった。同年6月、「春日原住宅地区」も完全返還された。約156万㎡におよぶ広大な敷地は、一旦国有地となり、協議の結果、航空自衛隊春日基地、春日市役所、春日公園、春日高校、大利中学校や大利小学校、九州大学筑紫キャンパス等に整備された。

基地返還は雇用や産業に大きな影を落としたが、そのなかでも、アメリカ文化に影響された民間事業の創業が複数みられる。「春日原住宅地区」のcock見習いだった江頭匡一氏は、株式会社ロイヤルホールディングの前身会社を1950年に創業した。牧平年廣氏は、基地でのクリーニング業のノウハウに目をつけ、株式会社きよくとうを1964年に創業した。また、同年創業の斉田弥太郎氏と鍋島市右衛門氏の共同出資である株式会社マルキョウは、開業当初にベルトコンベア式レジスターが注目をあつめている。このように、板付基地の設置により、日本に持ち込まれたアメリカ文化はかたちを変えながらも、まちの生活に溶け込んでいる。

2.2 春日ベース・ハウスの会について

「春日ベース・ハウスの会」は、米軍ハウスを「わがまちの貴重な歴史遺産」と捉え、その保存・活用を考えようと2014年に発足した。

当会の概要は図3の通りである。

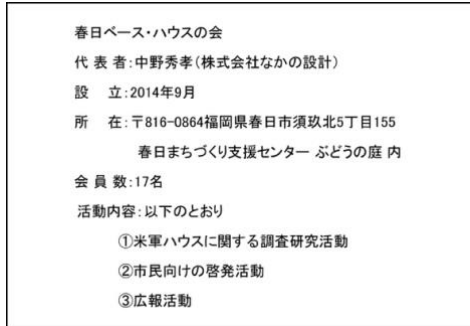


図3 春日ベース・ハウスの会概要

当会の活動趣旨は「戦後から市制施行前年まで、米軍基地のまちであったという春日市の貴重な記録及び記憶が失われていくことに危機感を持ち、この時代を象徴するものとして、米軍ハウスを『物言わぬ語り部』と位置づけ、これらにまつわる事柄の保存と継承を目的に活動している²⁾である。

メンバー構成は図4の通りで、市民と専門家の2つの目線が内在し、活動に厚みを持たせることにつながっている。また、メンバーの加入は、活動がきっかけとなることが多く、活動が認知される重要性がわかる。

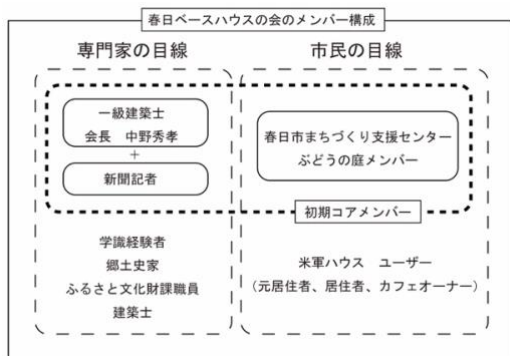


図4 春日ベース・ハウスの会のメンバー構成

発足の経緯は、筆者の中野秀孝が新聞記事に掲載されていた米軍ハウスを活用したカフェ・アニパニに出向き、(公社)福岡県建築士会のヘリテージマネージャー講習会の課題としてカフェ・アニパニの実測を行ったことがきっかけであった。

実測調査の結果をもって、福岡県教育委員会文化財保護課の田上稔氏に、指定(登録)文化財の可能性を相談

したところ「市民活動から始め、地域の人々に認知してもらえば、文化財への道が開けるのでは」との助言があり、まずは市民活動をと考え、春日市まちづくり支援センター「ぶどうの庭」に相談し、会の設立につながった。なお、「ぶどうの庭」は、まちづくりに係わる市民活動を支援することを目的とした市民団体である。

設立以降の主な活動実績は表1の通りである。

表1 春日ベース・ハウスの会の主な活動実績

年月	活動内容	
2014年~	●まち歩きで米軍ハウスの所在調査開始	
2014年10月12日	●第1回「まちあるき」開催	活動の取材
2015年2月6日	◎毎日新聞掲載: 春日市 米軍ハウス 価値を再認識し 保存・活用目指す 建物と「記憶」も残したい	活動の取材
2015年2月17日	◎西日本新聞掲載	活動の取材
2015年~	■当時を知る地元の人に聞き取り開始	メディア登場が続く
2015年6月16日	◎NHK「ロクいち福岡」放送	春日市の関心
2015年6月7日	△八女福岡の伝道地区見学	
2015年8月30日	△航空自衛隊春日基地の米軍遺構見学	
2015年9月7日	◎読売新聞掲載: 基地の記憶「米軍ハウス」	
2015年11月4日	△九州大学芸術工学部にて講義	
2015年11月21日	◎西日本新聞掲載: 地域の歴史遺産 米軍ハウス巡る	
2015年11月29日	●第2回「まちあるき」開催	
2016年2月5日	◎春日市報掲載	
2016年~	■古い地図で米軍ハウスの所在確認開始	
2016年3月13日	★現存した米軍ハウスの解体前見学とお別れイベント開催	
2017年11月4日~23日	★□春日市故園の丘歴史資料館「米軍ハウスの世界」展示企画開催 * 春日市との共催	春日市で成果をまとめた展示会開催
2017年11月19日	●第3回「まちあるき」開催 * 上記展示会イベントとしてまちあるきを開催	
2017年11月28日	◎TVQ ニュース放送	
2018年3月12日	●第4回「まちあるき」開催	
2018年5月10日	★春日市共催イベント プラ春日歴史さんぽ「ベースハウスを歩く」開催	
2018年8月14日	◎RKB 今日感テレビ放送	
2018年10月	□福岡銀行春日原支店にてロビー展開催 パネル展示	
2019年2月3日	★「米軍ハウスを歩く語ろう」(中学生の地域学習との連携)開催 春日西中学校米軍ハウス発表会企画開催	2017年 2名加入
2019年3月	□小冊子「春日市内の米軍ハウス記録調査 米軍ハウスの世界 ~あそこ、春日のまちにアメリカがあった~」を発行(福岡銀行ふるさと振興基金採択事業)	小冊子作成で活動に幅
2019年5月19日	●★春日市イベントとして、まちあるきを開催	2019年 1名加入
10月	■大野城市ふるさと文化財課、九州産業大学と合同で西鉄沿線の残存状況実態調査	大野城市の関心
11月~2020年2月	■九州産業大学の学生が卒業論文で外観目視調査	大野城市の調査参加
12月	■解体予定の春日市の米軍ハウスの実測調査	より多くの調査活動開始
2020年2月	■米軍ハウス「ソテツハウス(通称)」「(大野城市瓦田)緊急実測調査 * 九州産業大学、春日ベース・ハウスの会、大野城市と合同調査後、解体	専門家メンバー増加
2月	■二日市の米軍ハウスの実測調査	2020年 5名加入
3月	◎テレビ西日本「もち浜ストア」アニメ取材	
4月	◎西日本新聞掲載: 「米軍ハウス」改装して再生	
10月~11月	★大野城市ふるさと文化財課 主催 大野城市心のふるさと館「大野城市の戦争と暮らし展」企画展示協力 * 春日ベース・ハウスの会から資料借用・展示協力 ●同上企画展関連イベントまち歩き「米軍板付基地の思い出を語る」 * 春日ベース・ハウスの会の解説協力 ★同上企画展関連イベント特別企画「米軍板付基地の思い出を語る」 * 春日ベース・ハウスの会の司会及び参加協力	調査活動の充実・自治体との連携の増加
11月13日	◎西日本新聞掲載: 暮らし方を変えた米軍ハウス	
11月14日	◎ケーブルステーション福岡 放送	
11月	●福岡県建築士会地域会イベント「米軍ハウスまち歩き」	
11月	★春日市まちづくり支援センターぶどうの庭「オンラインであい祭」団体活動紹介	
12月	■米軍ハウス(太宰府市幸府)聞き取り調査 * 大野城市ふるさと文化財課による実施	
2021年2月	■アニメの実測調査と模型制作 * 九州産業大学と合同で実施	
3月~4月	■米軍ハウス(大野城市白木原・曙町・栄町・雑餉隈町)実態調査 * 大野城市ふるさと文化財課による実施	
3月	★アニメのお別れイベント	
4月	■太宰府市幸府と大野城市乙金の米軍ハウスの実測調査と聞き取り調査 * 大野城市ふるさと文化財課と合同で実施	2021年 1名加入

凡例: ●まち歩き ■調査 ★イベント ◎マスコミ取材 □成果発表(展示会・小冊子) △その他

3. 保存調査活動の報告

3.1 米軍ハウスの残存状況調査

当会では春日市を中心に、2016年から複数回にわたり一定の範囲での悉皆調査を行い、米軍ハウスの残存状況を把握した。調査に際しては、1962年の地図（善隣、福岡地典）を参考にし、「外人」、「米人」、「米人宅」と記載があるところを重点的に検証していった。図5のように、1962年当時の地図上では147戸の米軍ハウスを確認したが、そのうちで現地調査により残存していることを確認できたのは21戸であった（2017年10月時点）。

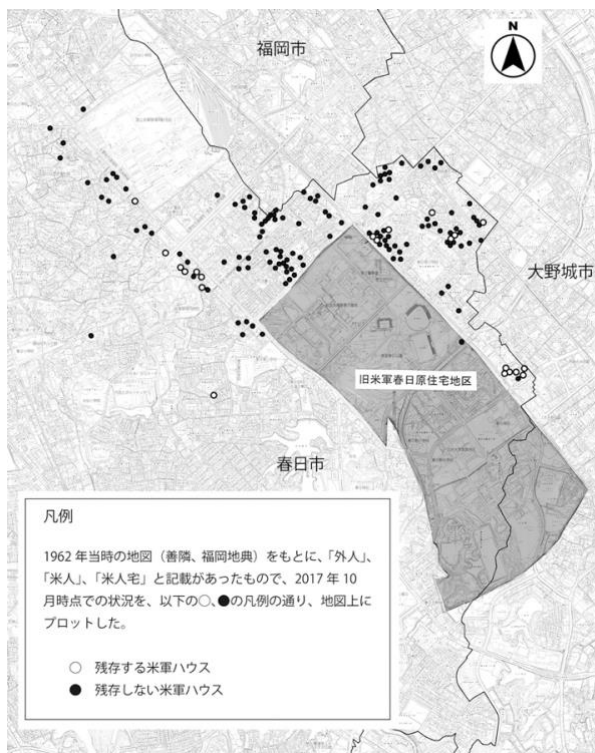


図5 春日市の米軍ハウスの残存状況

(2017年10月、春日ベース・ハウスによる調査結果)

一方で、調査が春日市に偏っていることから、大野城市の調査を進める必要があると考え、大野城市教育委員会ふるさと文化財課（以下、大野城市ふるさと文化財課と記す）に協力を要請し、2019年10月に、当会、九州産業大学、大野城市ふるさと文化財課の合同で、大野城市の西鉄沿線での残存状況の悉皆調査を実施するに至っている(写真1)。

その後、大野城市ふるさと文化財課では、1962年の地図（善隣、福岡地典）を参考にしながら調査する当会の手法を用い、継続調査を行っており、2019～2021年4月までに、大野城市内で39戸の米軍ハウスの残存を把握している。調査では、建て替えが難しい接道のない奥まっ

た場所での残存が多く、宅地開発が進む中、米軍ハウスが取り残されるかたちとなっている。



写真1 2019年10月悉皆調査の様子（調査後の情報整理）

3.2 米軍ハウスの実測調査

2021年6月現在で、調査協力が得られた6件の実測調査を行った。調査では、間取りや寸法の採取に加え、建物の改変状況や建築材料の確認も行った。こうした実測調査は、協力者からの情報提供を得て、解体前に緊急に行われる場合があり、うち3戸はすでに解体されている。

米軍ハウスは平屋の一戸建ての木造住宅で、在来工法で建築されている。壁はモルタル塗り、屋根はセメント瓦葺きの切妻屋根で、モルタル塗り回しの破風が共通した特徴である。出窓がある場合が多く、写真2のように出窓下は斜めハンチの形状となっている米軍ハウスが数多くみられ、外観の大きな特徴となっている。



写真2 典型的な米軍ハウス（ヅツハウス）の外観（森田英義氏撮影）

玄関付近には、ペンキで「IAB」（Itazuke Air Baseの略称）と「House Number」（2～4桁の数字）が記されていた。設備面では、水洗の洋式トイレやバス、シャワーが備え付けられ、外側に給水塔をもつ場合もある。また、ソテツなどの南国風な庭木が植えられていることが

多い。窓枠と戸の色は青緑色などのペンキで塗られており、内装は壁紙ではなく、ペンキで仕上げられていた。ホールに飾り棚が造り付けられている場合もある。

実測調査を行った米軍ハウスの一つである「IAB844」：愛称ソテツハウス（大野城市瓦田）は、まち歩きでの見学先の一つであり、当会にとって重要な意味を持っていた。調査は解体直前の2020年2月に実施され、当会のメンバーの一級建築士や米軍ハウス元居住者、大野城市ふるさと文化財課、九州産業大学が参加し、建築学と文化財保護の両方の視点を含む調査となった。調査の内容をまとめたものが図6である。

板付基地の返還後、米軍ハウスは日本人向けの賃貸物件等に使用され、フローリングだった部屋に畳を敷いたり、バスとトイレの間に仕切りを設けるなどの日本人の生活様式に合わせた改変が多数あるが、ソテツハウスでも同様の改変が見られた。図6のサニタリーのコメントのように、浴槽の外で身体を洗い流す習慣のあった日本人向けに、お湯がトイレ側に流れないように、立ち上がりを後からつけて対応していたことが確認できている。

外観目視のみの調査をふくめ、米軍ハウスでは、掃き出し窓の多くで改変の痕跡があり、この場合、当初は掃き出し窓ではなかった可能性が高い。その一方で、2021年4月に、大野城市ふるさと文化財課と合同で実測調査を行った米軍ハウス「IAB 2600 もしくは 2800」（大野城市乙金）は、所有者の話によると、外周部の建具形式は

当時のままとのことで、テラスに面した建具が掃き出しであった事例である（写真3）。また、改変がないと目される建具には、固定式の網戸が取り付けられていた。



写真3 大野城市乙金の米軍ハウスの外観

3.3 米軍ハウスの使い方調査

実家が、かつて米軍ハウスを所有しており、本人も米軍ハウスの住人と交流があった太宰府市の木村敏美氏に、大野城市ふるさと文化財課によって聞き取りを実施している。（2021年4月）調査では、当時の米軍ハウスでのアメリカ人の暮らしぶりに加えて、家具のレイアウトなど、米軍ハウスの使い方についての証言も得られている。

木村氏によると、米軍ハウスは工期が短く、良い材料を使うとかではなく、短期間で米軍ハウスとして形や体

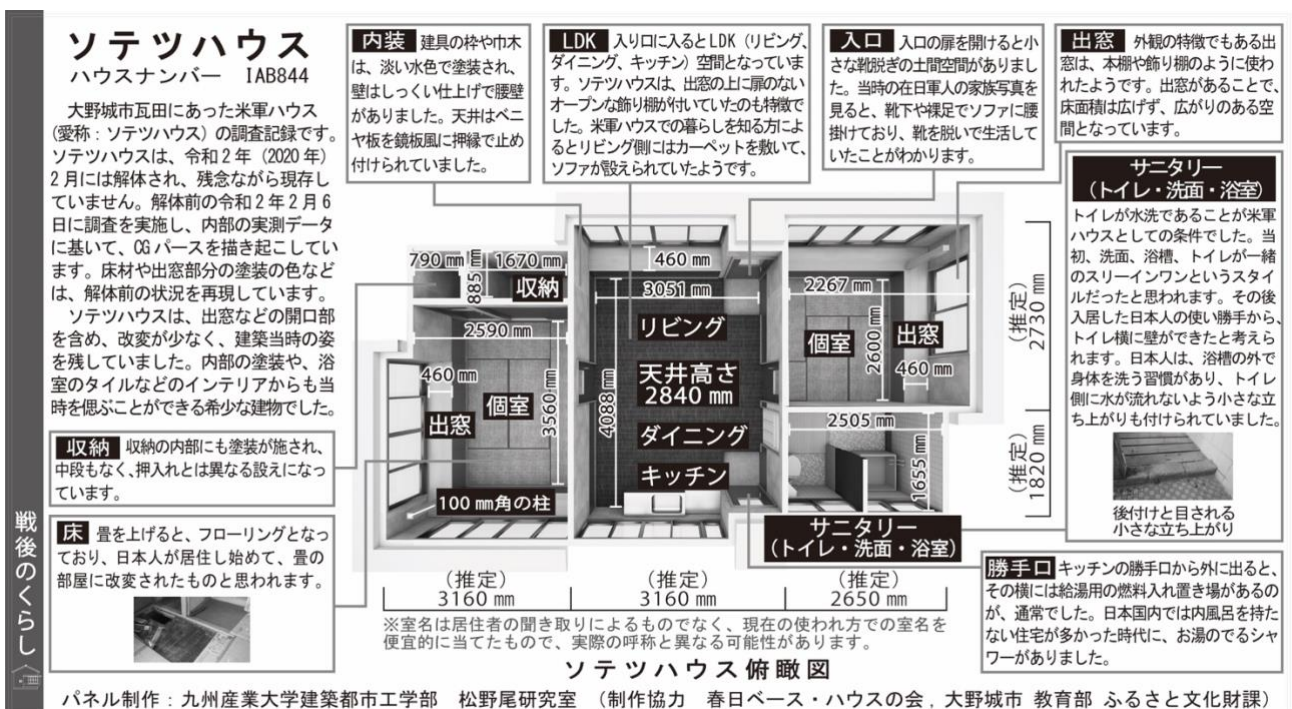


図6 ソテツハウスの実測調査内容（大野城市教育委員会ふるさと文化財課主催「大野城市の戦争とくらし」展への出展パネル

裁を整えることを優先した建て方だったと思われる。

「米軍ハウスは1階建てで、外観は白くて、玄関は靴を脱いで上がる小さな三和土があった。」「ハウスに入るとき、自分たちも靴を脱ぐようにしていた。ハウスの玄関は80cmほどの小さな感じで子ども3人が靴を脱ぐといっぱいになるくらいの広さだった。」とも話し、アメリカ人が靴を脱いで生活していたことを証言している。

また「間取りは3LDKで、玄関を上がると12畳のホールがあって、右側にテーブルと大きな冷蔵庫とガスコンロが置かれたキッチン。ホールから奥に廊下があって、廊下の左側に畳の部屋があった。」「廊下の右側にトイレとバスタブ、シャワーが一緒になっていて床はタイル張りだった。トイレは水洗トイレだった。」とも話しており、間取りや設備、素材に関する証言も得られている。

その他にも、大野城市乙金に建設された米軍ハウスの第一号を所有する池田満寿美氏に聞き取り調査を行った。(2021年4月)この聞き取り調査では、施工会社の確認ができています。池田氏からは「自分の家が大家になるが、家を貸す際の家賃は、外人協会のようなものがあって、そこが家の作りをみて家賃を決めていた。その当方で7万円くらいだったと聞いている。」といった家賃に関する具体的な証言があった。キッチンの使い方では、食品は缶詰ばかりを利用するため、キッチンが汚れていなかったと当時の様子を語っている。

4. 地域貢献活動の報告

4.1 板付基地と地域住民の関わりへの聞き取り

2019年までに、基地内で暮らした人、基地内で働いた人、地域として関わりがある人12名の聞き取りを行い、生業や米兵との交流を中心に証言をまとめ、小冊子²⁾として発行した。聞き取りでは、いずれも米軍を悪く言う人はおらず、当時の思い出を懐しく語っていた(写真4)。



写真4 聞き取り調査の様子

米軍ハウスを含めた建物などに関係した内容を抜粋すると次のような証言がある。地元で有名な有限会社「太平閣」の創業者の呉世宏氏は、当時紳士服の仕立て販売を営んでおり、「米軍ハウスは、当時はそうとう家賃が良かった(高かった[筆者補足])。われわれの家賃は3000~5000円であったが、50ドル、1万8000円。私も『ハウス3軒を買わないかと』言われ、60万でした(後略)。」²⁾と話している。

その他にも、1951年から基地内の春日コートで暮らしていた鶴貝實氏は「春日コートの部屋は、今で言えば、オール電化でした。冬はスチームで暖房し、夏は扇風機で涼んでいたと記憶しています。春日コート付近にはボイラー室があり、すぐ横にはたくさんの石炭と高い煙突が立っていました。」²⁾と設備について話している。

4.2 展示会やメディア対応を中心とした広報活動

調査結果をまとめ、歴史や文化を伝える展示会もっており、2017年に春日市奴国の丘歴史資料館にて実施した「～あのころ、ぼくらのまちに基地があった～ようこそ!米軍ハウスの世界へ」(春日市教育委員会と春日ベース・ハウスの会の共催企画)が最も規模が大きいものであった。この展示会の来場者は800人を超え、奴国の丘歴史資料館では来場数が多い企画となった(写真5)。

会場で実施したアンケートも回収数が301枚にのぼり、関心の高さを示している。アンケートには、初めて知った、懐かしいという記述が多かった。中には、「昔、父がハウスを所有していました。(中略)広いリビングやメイドさんがいたのを思い出しました。」といった具体的な書き込みも複数見られた。



写真5 春日市奴国の丘歴史資料館展示の様子

2020年10月~11月には、大野城市ふるさと文化財課主催で大野城心のふるさと館にて開催された企画展「大野城市の戦争とくらし」の企画及び展示に協力した。展示では、米軍ハウス「ソテツハウス(愛称)」の調査内容

をパネルにて紹介した。その他、これまでの聞き取りに協力してもらった人から、当会に譲り受けて保管していた当時のタイプライターやレジスターなどを展示品として提供した。なお、関連する特別企画「米軍板付基地の思い出を語る」では、当会のメンバーの郷土史家の藤原義弘氏がファシリテーターを務めた。

2019年には、当会の活動が福岡銀行のふるさと振興基金に採択され、小冊子²⁾を発行した。この小冊子には、主に板付基地に関する文献史料から整理した米軍ハウスにまつわる歴史や、4.1で述べたこれまでの聞き取りを書き起こした内容を掲載している。印刷した小冊子は、春日市内の小中学校、図書館、大学、春日市に寄贈した。

その他、メディアからの取材依頼も多く、新聞、TVなどで取り上げられるたびに、認知度が上がっていった。

4.3 市民向けの啓発活動

(1) 地域学習

地域学習としては、2018年度と2019年度に春日東中学校で開催された「東中塾」がある。「東中塾」とは、課外授業として複数設定された課題に生徒が取り組むもので、その一つに「自衛隊コース」があり、そこでの課題が、春日市内にある「陸上自衛隊福岡駐屯地」と「航空自衛隊春日基地」の由来を調べるというもので、春日東中学校から春日ベース・ハウスの会に依頼があり、メンバーが講師として米軍ハウスの説明に出向いた。

後日、「東中塾」での取り組みを発表する場として、地域の人達を集めた座談会と成果発表会も開催することとなり、合わせて、まち歩きイベントも開催した。

(2) まち歩き

当会では、地域の歴史を市民に知ってもらおうと現存する米軍ハウスを巡るまち歩きを開催しており、毎回好評であることから複数回開催することとなった。



写真6 まち歩きの様子

まち歩きは、一般市民、(公社)福岡県建築士会会員、

九州大学芸術工学部学生など、回ごとに異なる対象者に向けて実施しており、毎回20名程度の参加者があった。当会のメンバーがハウスの前で説明している最中に住民がでて来られ、交流が生まれることもあった。(写真6)

(3) 自治体及び他団体との連携状況

前述のように春日市、大野城市と連携しながら展示会やまち歩き、悉皆調査などを行っている。自治体との連携は、活動が地域にとって有益であるという裏付けもいえ、地域の信頼感につながっている。今後、米軍ハウスの登録文化財の可能性を模索するにあたり、自治体との連携は重要性が増すといえる。

また、(公社)福岡県建築士会からは、2017年度から毎年、活動に対して助成金を受けている。活動内容について発表の機会を得ており、建築士の注目度も高い。

4.4 元米軍ハウスを拠点とした地域コミュニティ形成

(1) カフェ・アニパニの概要

米軍ハウスをコンバージョンしたカフェ・アニパニは、春日市に所在し、築年は不詳であった。木造平屋の建物は約56㎡で、一部増築されていた。板付基地周辺の米軍ハウスの特徴である出窓と出窓下の斜めハンチはないが、破風がモルタルの塗り回しとなっている(写真7)。この建物は所有者の意向で2021年4月に解体された。

カフェ・アニパニは、2006年にNPO法人アジア女性センターがスタートさせ、その後、竹井京子氏が2014年の秋頃に経営を引き継いでいる。その時点では、既に内部の改装はなされていた。2006年以前の詳細は不明である。



写真7 アニパニの外観(2021年4月解体)

(2) 春日ベース・ハウスの会にとってのカフェ・アニパニの役割

カフェ・アニパニは、当会の重要な活動拠点であった。まち歩きの際のスタート地点、ゴール地点でもあり、レクチャーの場であった。悉皆調査では作業の場が必要で、

2017年以降、カフェ・アニパニがその役割を担ってくれていた。また、メディアの取材の場でもあり、当会の活動を象徴するような建物であった。ミーティングの場でもあると同時に、メンバーがふらっと訪れ、たまたま居合わせたメンバーと情報交換することもあった。

(3) カフェ・アニパニと地域コミュニティ

2021年5月に行った竹井氏への聞き取りから、地域コミュニティとの関わりを整理すると、以下のようになる。

経営を引き継いだ当初、客層の中心は近所の年配の人達であった。この常連客は、カフェ・アニパニを自分の家以外でのお茶のみの場として利用しており、あたかも「コミュニティハウスのようにであった」と竹井氏は述べている。いずれも、この建物が米軍ハウスであったことを知っており、古い思い出の場所として捉えていた。

2014年の当会の立ち上げ以降は、ご近所以外での来客が見られるようになり、米軍ハウスに興味がある男性客が増えたとのことである。当初、竹井氏はカフェ・アニパニの建物が米軍ハウスとは知らず、米軍ハウスを知る年配の常連客が、興味をもって訪れた人に説明をする場面もしばしば見られた。また、各メディアに取り上げられた効果が大きく、来客数が増えていったと話している。元米兵の人が家族を伴い、訪ねてきたこともあった。

カフェ・アニパニは、地域の習い事の場所として貸し出され、語学、ウクレレ、子ども書き方教室など8講座にのぼり、あたかも公民館的な機能も有している。その他にも、コンサート会場としても使用され、カフェの機能をこえて、地域コミュニティの場として成熟していた。

5. まとめ

保存調査活動として、残存状況調査、実測調査、使用方調査を行った。板付基地周辺の米軍ハウスは、切妻屋根の木造平屋で、壁はモルタル塗り、屋根はセメント瓦葺であることが共通している。出窓がある場合が多く、出窓下が斜めハンチの形状であることと、破風がモルタル塗り回しとなっていることが、大きな特徴である。洋式のバス・シャワー、水洗トイレ、網戸が備え付けられていたのも特徴といえる。また、アメリカ人の生活は土足とされていたが、使い方方の調査での証言や提供された写真から靴を脱いで生活していたことが確認できている。

地域貢献活動としては、聞き取り、広報活動、啓発活動を行なった。その中で、特に地域のまち歩きが効果的であった。まとまった人数で移動していることから、参加者以外の目にもとまりやすく、地域住民からの注目に

つながっている。参加者にとっては、普段目にするまちなみの中で気がつかない発見があることが興味関心を持ちやすいと考えられ、まちづくりに有効な手段といえる。

そして、こうした活動を支えていたのが、米軍ハウスをコンバージョンしたカフェ・アニパニの存在であった。カフェ・アニパニは、当時を知る地域住民にとってはアメリカ文化と触れ合った思い出の場所であり、その存在は思い出を想起させる触媒となっていた。加えて、活動拠点として、かつ米軍ハウスの空間を体験できる場として、当会を象徴する建物となっていたことが、地域と当会の活動を結びつけることにつながっていた。

当会の活動成果としては、米軍ハウスの認知度向上があげられるが、特に当時を知る地域住民への聞き取りを冊子にまとめたことが重要な意味を持つ。1年近く、丁寧な聞き取りを行うことで当時の様子が浮き彫りになり、地域住民と当会のメンバーと交流にも繋がった。

今後は、登録文化財への道を模索しつつ、町に埋もれた米軍ハウスを掘り起こし、カフェ、子供食堂などの地域住民が利用できる場として活用につなげたい。当会ではカフェで提供する白木原バーガーなどコンテンツの構想もあり、活用方法も提案しながら、活用したいと考える人と所有者とを結びつけていきたい。更に、米軍ハウスを単体ではなく、面として捉えることができるとなれば、住民の認知度も高まり、世代を超えて町の歴史を共有できるコミュニティの場になると考えている。

このように、地域住民と記憶を共有できる歴史的建造物を活用することはまちづくりに効果的であると考えられ、今回の報告はその一例として位置付けられる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、これまで、聞き取り調査や実測調査、まち歩きなどにご協力頂きました多くの皆様に感謝申し上げます。

注

- 1) 西尾聡基、大場修、砂本文彦、玉田浩之、角哲、長田城治、村上しほり、占領下福岡における施設接収と米軍ハウス— 占領下日本の都市・住宅に関する研究その12—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(中国), pp241-242, 2017年8月
- 2) 春日ベース・ハウスの会, 福岡県春日市内の米軍ハウス調査記録 米軍ハウスの世界 ~あのころ、春日のまちにアメリカがあった~, 春日ベース・ハウスの会, 2019年3月
- 3) 米軍ハウスの数について、赤司岩雄氏が「大野城市巡杖記」に「五百戸位あったと思われるが正確な数字はわからない。」としている。また、参考文献1)には850戸のハウスを確認していると記載されている。